

# 揚櫨木遺跡 第10次調査

—— 店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2007

埼玉県狭山市遺跡調査会

狭山市遺跡調査会報告書 第18集

う つ ぎ い せ き

# 揚櫨木遺跡 第10次調査

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 7

埼玉県狭山市遺跡調査会

# 序

狭山市域の遺跡は中央を貫流する入間川の左右両岸に、川に沿う形で所在します。いずれも当時の人々の生活を知る上で、たいへん貴重なものです。しかし、昭和40年代後半より増加した諸々の開発行為により、これらの遺跡は破壊の危機にさらされることとなります。狭山市はそれら開発行為によって形としては滅失してしまう埋蔵文化財を事前に発掘調査し、記録・保存を行っています。

この報告書もその記録保存事業の一つの成果を表したものです。

本報告書は平成10年度に実施した調査で、店舗建設に伴って行われたものです。奈良・平安時代の住居遺構が発見され、隣接する遺跡群とともに、同時代の人々のくらしの一端を明らかにする資料が出土しています。

この成果が当地域の研究と埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、市民の皆様への生涯学習に資するものになれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査においてご理解いただいた有限会社竹ノ花総業、献身的に調査に従事し、報告書刊行までご協力いただいた協力員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成19年8月

狭山市遺跡調査会  
会長 門倉節明

# 例 言

1. 本書は狭山市狭山地内所在の揚櫃木遺跡第10次調査の報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は店舗建設に伴うもので、狭山市遺跡調査会が発掘調査を実施し、調査費用は中里泰義氏が負担した。
3. 発掘調査届に対する文化庁の受理番号と調査原因は、以下のとおりである。  
平成10年12月21日付、教文第2 - 160号 店舗建設
4. 発掘調査期間は、整理・報告書作成期間は、以下のとおりである。  
発掘調査：平成10年12月11日～平成11年1月14日  
整理・報告書作成：平成17年8月1日～平成19年6月29日
5. 発掘調査は石塚和則が担当した。また、伊倉榮男、久保正雄、坂入しげ子、坂入誠、田口文枝、堀内義一、増田富雄、山本とし子が参加した。
6. 図版の作成と出土品の整理は安井智幸が担当した。また、石塚 香、岸千代子、工藤匡史、瀬戸山真由美、橋本弓子、晝間由実子、三木康介の補助を受けた。
7. 本書の執筆は安井があたった。
8. 本書の編集は狭山市遺跡調査会が行った。
9. 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏並びに諸機関から御教示・御協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略、五十音順）  
赤熊浩一 加藤恭朗 田中弘明 中平 薫 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
埼玉県教育委員会生涯学習部生涯学習文化財課 三芳町歴史民俗資料館

# 凡 例

1. 挿図の縮尺は以下のとおりである。また、各挿図にスケールを付した。  
遺構図：1/60、調査区全測図：1/100、遺物実測図：1/3、1/6
2. 遺構平面図の方位は座標北を、遺構断面図の水糸レベルは、海拔高を示す。
3. 遺構の表記記号は以下のとおりである。  
住居跡：SJ、土壌：SK、溝跡：SD
4. 遺物観察表の表記は口径、器高、底径はcmを単位とし、( )内の数値は推定値・現存値である。色調は部分省略し、青灰・灰白・褐灰・褐・明褐、他とした。胎土は肉眼で観察できるものを示し、焼成は良好・やや良好・普通・やや不良・不良の5段階に分けた。残存率は図示した器形に対し、5%単位で示したが、20%以下で特徴を示し難いものは「破片」として処理した。
5. 本報告書に掲載した出土品は狭山市教育委員会で保管している。

# 目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
図版目次	
調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の組織	1
3 発掘調査の経過	2
遺跡の立地と環境	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
3 遺跡の概要	8
遺構と遺物	9
1 調査成果の概要	9
2 検出遺構と出土遺物	10
住居跡	10
土壌	14
溝跡	14
まとめ	17

# 挿図目次

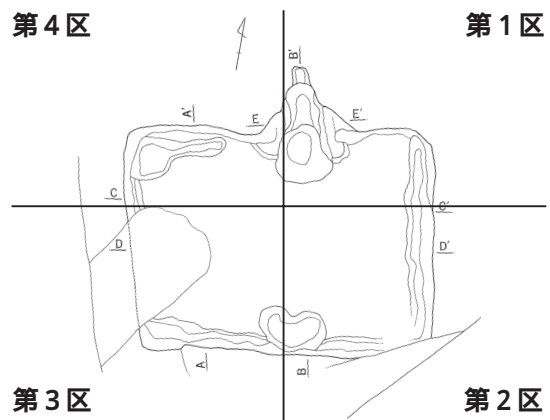
第1図	狭山市遺跡分布図	5
第2図	揚楯木遺跡第10次調査区位置図	8
第3図	揚楯木遺跡第10次調査区全測図	9
第4図	第91号住居跡	10
第5図	第91号住居跡出土遺物(1)	11
第6図	第91号住居跡出土遺物(2)	12
第7図	第41・42・43号土壌	14
第8図	第44号土壌・第3号溝跡	15
第9図	第3号溝跡出土遺物	16

# 写真図版目次

図版1	調査区全景 第91号住居跡
図版2	第91号住居跡カマド全景 第41号土壌全景
図版3	第42・43号土壌全景 第44号土壌・第3号溝跡全景
図版4	第91号住居跡出土遺物
図版5	第3号溝跡出土遺物 調査風景

## 【遺物の出土位置について】

本調査では必要に応じて右図の様に住居を4分割し、カマドのある壁右側を第1区として時計回りに番号を進め、それぞれの区画で遺物取上げを行った。出土遺物の説明にある「第 区」は、右図に則している。なお、複数カマドの場合、主要カマドのある壁右側を第1区とした。カマドが検出されなかった場合は、主軸とその垂線で4分割し、北東に最も近い区画を第1区とした。



例 第91号住居跡

# 調査の概要

## 1 発掘調査に至る経過

平成10年11月17日に有限会社竹ノ花総業より狭山市上奥富19 - 7の土地における埋蔵文化財の所在について照会があり、それに対して狭山市教育委員会は埋蔵文化財包蔵地台帳により揚櫃木遺跡に該当する旨を回答した。その後、埋蔵文化財の確認調査の依頼を受けて、同教育委員会が平成10年11月30日から平成10年12月1日にかけて確認調査を実施した結果、竪穴住居跡1軒、溝状遺構1条が検出された。この結果について、平成10年12月3日に地権者と同教育委員会が協議を開始。その結果、検出した遺構部分にかかる340㎡について、埋蔵文化財発掘調査の実施が依頼者に指示された。依頼者は平成11年1月中旬の工事開始を予定しており、対応が急がれるところであったので、狭山市遺跡調査会が主体となって平成10年12月14日に発掘調査を開始した。

本調査の文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査届に係る埼玉県教育委員会教育長の指示通知は例言に示したとおりである。

遺跡名	所在地	開発者	調査面積	時代
揚櫃木遺跡 (県遺跡番号22 - 027)	狭山市上奥富 19 - 7	中里泰義	340㎡	縄文・奈良・平安

## 2 発掘調査の組織

### 1) 発掘調査(平成10年度)

主体者	狭山市遺跡調査会	会長	野村甚三郎 (狭山市教育委員会教育長)
		理事	斎藤勝治 (文化財保護審議会委員長)
		理事	横田武雄 (教育委員会教育次長)
事務局	狭山市遺跡調査会	事務局長	増嶋長次 (社会教育課長)
		事務局	小淵良樹 (社会教育課主任)
		事務局	原 肇 (社会教育課主任)
		事務局	石塚和則 (社会教育課主任)
		調査担当	石塚和則 (社会教育課主任)

### 2) 報告書作成(平成19年度)

主体者	狭山市遺跡調査会	会長	門倉節明 (狭山市教育委員会教育長)
		理事	中内丈夫 (文化財保護審議会委員長)
		理事	池原昭治 (文化財保護審議会副委員長)
		理事	中込利男 (文化財保護審議会委員)
		理事	松本晴夫 (教育委員会生涯学習部長)
事務局	狭山市遺跡調査会	事務局長	利根川忠男 (社会教育課長)
		事務局	半貫芳男 (社会教育課主査)

事務局	石塚和則	(社会教育課主査)
事務局	田口 勉	(社会教育課主任)
事務局	安井智幸	(社会教育課主事)
整理担当	安井智幸	(社会教育課主事)

### 3 発掘調査の経過

発掘調査は、狭山市教育委員会が平成10年11月30日に行った埋蔵文化財確認調査の結果を受け、工事予定区域のうち、遺構が確認された340㎡を対象として実施した。調査の経過は、以下のとおりである。

平成10年度

平成10年12月11日(金曜日)

機材搬入。基準点測量及び測量用杭打ち作業を実施。

12月14日(月曜日)

仮設トイレ設置。

12月15日(火曜日)

作業開始。遺構確認開始。調査区南側で竪穴住居跡1軒(第91号住居跡)、北側で溝1条(第3号溝)を検出。他に調査区内に点在する土壌4基を確認。また、調査区北側は、広範囲に渡って旧建造物の基礎により破壊されており、溝は東西に分断されている。

12月16日(水曜日)～12月18日(金曜日)

第91号住居跡の掘り下げ。18日、セクション図終了。

12月21日(月曜日)

第91号住居跡のセクションベルトを除去し、清掃して写真撮影を行う。終了後、第2号溝、土壌の調査開始。

12月22日(火曜日)～12月25日(金曜日)

第2号溝、土壌が概ね掘り上がる。午後、年末年始作業中断のため、柵等の養生を行う。

12月28日(月曜日)～平成14年1月4日(月曜日)

年末年始のため、現場中止。

平成11年1月5日(火曜日)

現場再開。第2号溝、土壌の掘り下げ終了。

1月6日(水曜日)

調査区内を清掃し、遺構個別写真及び全景写真を撮影する。終了後、実測準備に入る。

1月7日(木曜日)～1月12日(火曜日)

遺構の個別平面図作成。第91号住居跡のカマド調査開始。

1月13日(水曜日)

第91号住居跡、カマド調査終了。機材撤収準備。

1月14日(木曜日)

仮設トイレ及び機材撤収。現地作業終了。

# 遺跡の立地と環境

## 1 地理的環境

狭山市の中央には、外秩父山地の伊豆ヶ岳・武川岳等を水源とする名栗川と青梅市に水源を持つ成木川とが加治丘陵で合流した入間川が流れており、北側となる左岸は二段、南側となる右岸は三段の河岸段丘を形成している。奈良・平安時代の遺跡はこの入間川を中心にして分布するものが多い。

入間川左岸は武蔵野台地の一部である入間台地に属し、北から宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、御所の内遺跡、小山ノ上遺跡、鳥ノ上遺跡、富士塚遺跡、森ノ上遺跡と存在し、若干離れて今宿遺跡、上広瀬古墳群、金井上遺跡、宮地遺跡、東八木窯跡群等が連綿と帯状に続く。

入間川右岸は武蔵野台地に属する旧多摩川の隆起扇状地で、北から稻荷上遺跡、揚榿木遺跡、坂上遺跡、戸張遺跡、中原遺跡、峰遺跡、滝祇園遺跡等が左岸の遺跡群に対峙する形で集落を形成する。これら右岸の遺跡群は地下水脈が深く、飲料水の確保が困難であるにも関わらず形成されていることから、入間川の水運の利用が目的であったと考えられる。また、鉄製農具や下総系統の土師器が出土していること、8世紀後半に集中して集落が出現していること等から、移住民も利用した大規模な開墾事業に関連する集落跡であることも考えられる。

## 2 歴史的環境

先土器時代の遺跡としては、平成2年度から平成3年度にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した西久保遺跡（39）発掘調査において、先土器時代の石器製作跡が多数発見され、当市における当該期の一端が明らかとなった。狭山市遺跡調査会でも平成6年度に同遺跡の発掘調査を行い、武蔵野台地第4層下部の良好な資料を得ている。また、宮地遺跡（8）では細石刃、細石核が表採されている（城近他1972）。

縄文時代の遺跡は、大略草創期から後期後半までが確認されている。概観すると、前期黒浜期に集落の明確化、遺跡数の増加等、大きな動きが認められるが、数的には中期中葉から後葉のものが大勢を占めており、この時期偏差が市内の縄文遺跡を特徴付けている。過去の調査事例もこの時期に集中する。

市内遺跡は、表面採集資料による時期決定も含めてであるが、縄文時代中期には遺跡数が39箇所と急増し市内遺跡全体の60%を超え、遺跡数の増加、集落規模の拡大が顕著となる。しかしながら、中期終末から後期初頭では、周辺地域にも認められるように集落規模は急速に縮小する。入間川左岸においては、森ノ上遺跡（16）の他、宮地遺跡、字尻遺跡（24）、右岸では揚榿木遺跡（45）等、中期末から後期初頭の柄鏡形住居跡が数軒単位で検出されており、市内各地で集落の縮小、住居軒数の急激な減少が確認されている。柄鏡形住居跡は、周辺の入間市、飯能市、日高市でも多くの検出例があり、県内でも入間地方は本種遺構の分布密度が濃いことで知られている。ただし、森ノ上遺跡や字尻遺跡のように当該期のみに限定された集落は稀有な存在と言えよう。なお、入間川左岸に立地する今宿遺跡（13）では、中期末の張出部を持たない径3m前後の小型住居跡が確認されている。本種住居跡は、日高市宿東遺跡でも検出例があり、系統や柄鏡形住居跡との共存関係等、興味深い問題が提起されている（渡辺1998）。

縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺跡は当市での確認例が非常に少なく、森ノ上遺跡で弥生時代後



期から古墳時代前期と考えられる搬入土器が一点報告されているのみである（安井2005）。

古墳時代の遺跡として当市には沢口上古墳群（5）、笹井古墳群（6）、上広瀬古墳群（14）、稲荷山公園古墳群（56）と滝祇園遺跡（42）が所在する。現在まで調査が実施されたのは笹井古墳群、上広瀬古墳群、滝祇園遺跡でいずれも7世紀後半のものと考えられる。笹井古墳群は石室の構造が特異なため、奈良時代以降の墳墓の可能性も否定できない（小淵他1983）。

奈良・平安時代の遺跡は主に集落跡で、入間川左岸に帯状に23遺跡、右岸は久保・不老川流域のものを合わせて14遺跡存在する。奈良・平安時代における市域での人々の本格的な居住は霊亀二年の高麗郡設置が契機となったと考えられている。『続日本紀』の記事によると、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の高麗人をかき集め、武蔵国入間郡の一部に居住させている（『続日本紀』巻七霊亀二（716）年五月辛卯（16日）、以駿河。甲斐。相模。上総。下総。常陸。下野七國高麗人千七百九十九人。遷于武蔵國。始置高麗郡焉）。滝祇園遺跡の古墳時代集落からも、この入植民が律令期に初めて市域に居住した人々ではないであろうが、このことが市域における律令期の集落形成に影響を与えていることは推察できよう。

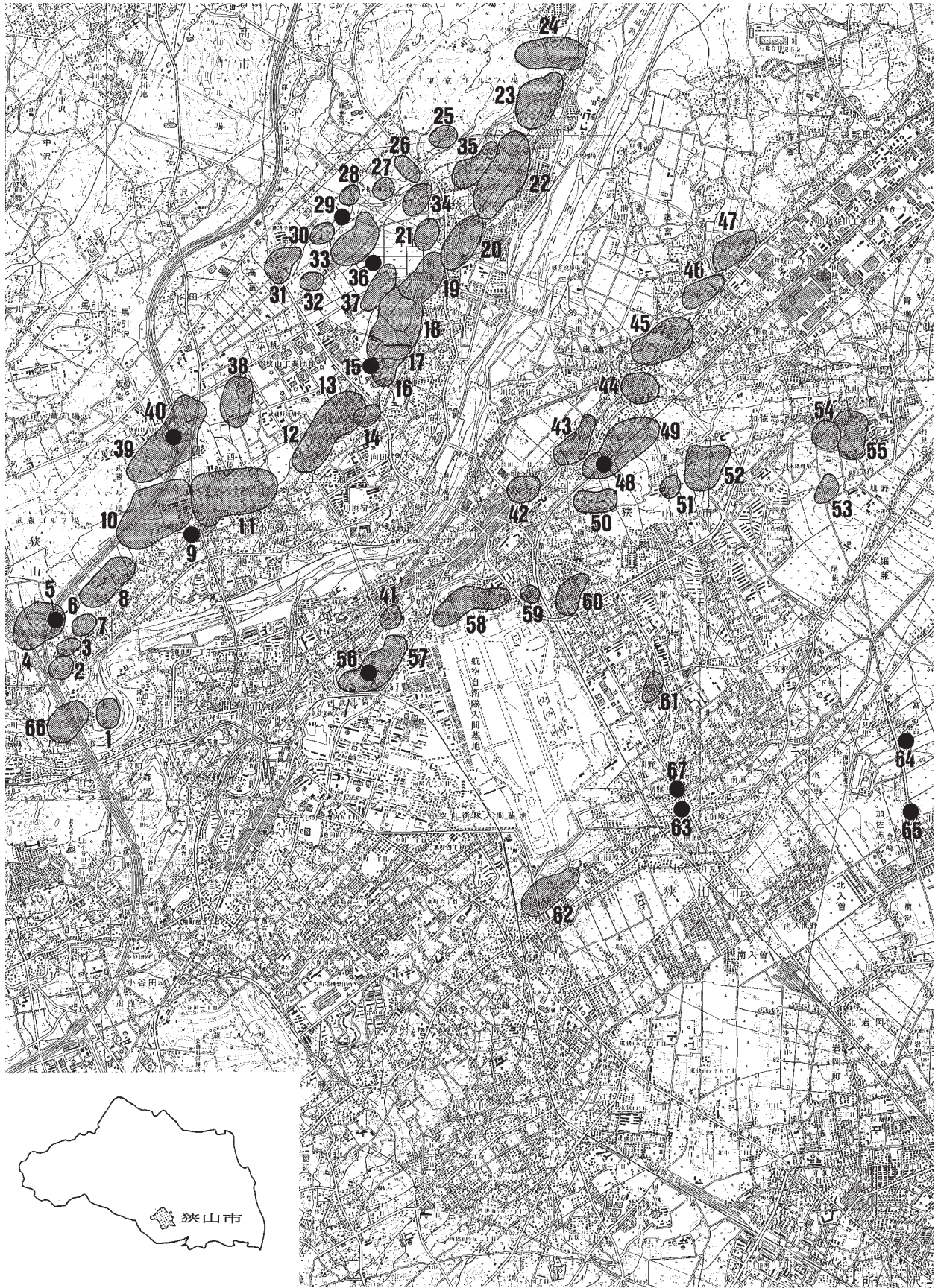
高麗郡の設置とほぼ同時期に東金子窯跡群（入間市）が創業している。当時の供膳具たる須恵器は主に東金子と南比企（鳩山）窯跡群から供給されていたと考えられ、市域の遺跡からも多分に漏れず東金子・南比企の須恵器が出土している。東金子窯跡群の内のひとつ、入間市に所在する前内出窯跡は高橋一夫氏による編年案（高橋他1974）と、酒井清治氏による武蔵国の須恵器の総合的な編年案（酒井1987）、渡辺一氏による南比企産須恵器の編年（渡辺1990）を中軸とした集落遺跡出土の南比企産と東金子産の共伴関係から生まれつつある東金子窯跡群産須恵器編年等において最古段階に位置付けられている（市域にも東金子窯跡群の支群と考えられる東八木窯跡群（1）があり、前内出窯に先行する段階の窯跡ではないかとされているが、調査が行われていないため詳しい性格はわかっていない）。

前内出窯は古式（2号窯）と新式（1号窯）に分かれるが、古式は宮ノ越遺跡（23）、宮地遺跡、今宿遺跡等を中心に出土しており、山下6号窯よりは下の鳩山窯跡群B4号窯、若しくは赤沼14支群1・2号窯に近い様相の須恵器と共伴する（駒見1982）。酒井氏はこの内、前内出窯産と常陸産須恵器が共伴した宮地遺跡第16号住居跡に注目し、「宮地遺跡の常陸産須恵器に与えられた年代から、前内出窯期年代はほぼ国分寺創建期と推考できる」としている（酒井1987）。前内出窯の創業意図が国分寺創建に関するものと考えられると創業年の遡及は天平十三年を上限となってしまうが、前内出2号窯は瓦より須恵器の生産を主に行っていることから、創業のきっかけは国分寺創建以前に遡るものであろう。

そうなる前に戻るが高麗郡設置の霊亀二年より天平十三年に至る四半世紀弱の間、前内出2号窯が須恵器供給を担うことになるのだが、生産量が少ないこの時期は市域の集落遺跡から常陸（宮地）、相模（今宿）、甲斐（森ノ上）、下総（稲荷上）産の土器が出土していることから、前内出窯製品と搬入した供膳具を併用したのと考えられる。裏を返せば該期の遺構で霊亀二年五月辛卯条に記載されているそれぞれの国の産出する遺物が出土した場合、入植した人々の出身国を特定できるものとも考えられ、その遺構の所属する集落を分析することによって出身国別の入植状況を復元することも可能といえよう。

このように8世紀前半は市域が人の気を帯び始める非常に興味深い時期である。該期には宮ノ越遺跡、小山ノ上遺跡（19）、森ノ上遺跡、今宿遺跡、宮地遺跡、揚楯木遺跡、戸張遺跡（44）等がその例として挙げられる。

8世紀後半から9世紀初頭にかけて市域の戸数は増加し、供膳具もその消費量を増やす傾向にあるのだ



第1図 狭山市遺跡分布図

## 狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）

- 1 東八木窯跡群（22049）奈・平
- 2 八木遺跡（22068）縄（前・中）奈・平
- 3 八木北遺跡（22021）奈・平
- 4 八木上遺跡（22022）縄（前・中）奈・平
- 5 沢口上古墳群（22020）古（後）
- 6 笹井古墳群（22019）古（後）
- 7 沢口遺跡（22080）縄（早～中）古、奈・平
- 8 宮地遺跡（22018）縄（中）奈・平
- 9 金井遺跡（22071）中
- 10 金井上遺跡（22023）縄（草・前）奈・平、中
- 11 上広瀬上ノ原遺跡（22005）縄（草）奈・平
- 12 霞ヶ丘遺跡（22004）縄（中）奈・平
- 13 今宿遺跡（22002）縄（早～中）奈・平
- 14 上広瀬古墳群（22001）古（後）
- 15 森ノ上西遺跡（22079）先
- 16 森ノ上遺跡（22008）縄（中）奈・平
- 17 富士塚遺跡（22009）縄（中）奈・平
- 18 鳥ノ上遺跡（22010）奈・平
- 19 小山ノ上遺跡（22011）縄（中・後）古～中
- 20 御所の内遺跡（22012）奈・平
- 21 英遺跡（22074）奈・平、中
- 22 城ノ越遺跡（22013）縄（前・中）奈・平、中
- 23 宮ノ越遺跡（22016）縄（前・中）奈・平
- 24 字尻遺跡（22075）縄（前～後）奈・平
- 25 丸山遺跡（22037）縄（早・前～後）奈・平
- 26 金井林遺跡（22035）縄（前～後）
- 27 鶴田遺跡（22044）縄（前・中）
- 28 上ノ原東遺跡（22065）奈・平
- 29 上ノ原西遺跡（22063）縄（中）
- 30 半貫山遺跡（22061）中
- 31 稻荷山遺跡（22058）縄（後）
- 32 前山遺跡（22059）縄（中）
- 33 高根遺跡（22062）縄（早・中・後）
- 34 町久保遺跡（22034）縄（中）奈・平、中
- 35 宮原遺跡（22017）縄（前～後）
- 36 下双木遺跡（22078）縄（草）
- 37 上双木遺跡（22077）縄（中・後）奈・平
- 38 上広瀬西久保遺跡（22073）奈・平
- 39 西久保遺跡（22069）先、縄（草）奈・平
- 40 東久保遺跡（22070）先
- 41 上諏訪遺跡（22086）縄（中・後）
- 42 滝祇園遺跡（22066）縄（草～後）古、奈・平
- 43 峰遺跡（22024）縄（中・後）奈・平
- 44 戸張遺跡（22026）縄（前・中）奈・平
- 45 楊楯木遺跡（22027）縄（前・中）奈・平
- 46 坂上遺跡（22029）縄（中）奈・平
- 47 稻荷上遺跡（22032）縄（前・中）奈・平
- 48 上中原遺跡（22025）先
- 49 中原遺跡（22025）縄（早～後）奈・平
- 50 沢台遺跡（22079）縄（中）奈・平
- 51 沢久保遺跡（22041）縄（中）
- 52 下向沢遺跡（22042）縄（中・後）奈・平
- 53 吉原遺跡（22067）縄（前）
- 54 下向遺跡（22085）縄（前～後）
- 55 台遺跡（22084）縄（前～後）
- 56 稻荷山公園古墳群（22052）古（後）
- 57 稻荷山公園遺跡（22051）縄（中）
- 58 石無坂遺跡（22083）縄（中）奈・平
- 59 富士見西遺跡（22082）縄（中）奈・平
- 60 富士見北遺跡（22072）縄（前・中）奈・平
- 61 富士見南遺跡（22081）（縄）中
- 62 町屋道遺跡（22088）縄（前～後）奈・平
- 63 七曲井（22046）中
- 64 堀兼之井（22047）中
- 65 八軒家の井（22076）中
- 66 八木前遺跡（22087）縄（前・後）
- 67 堀難井遺跡（22089）中

が、消費される須恵器は東金子産の割合が南比企産を圧倒的に上回るようになる。南比企産は8世紀初頭から中頃までじわじわと前内出窯に押されてその割合を減らしていたが、ここにきて一気に落ちてしまう。この現象は東金子産の供給量の増加によるものと考えられ、要因として生産技術の変化が挙げられる。底部へラ削りの省略化と扁平・深身型坏の共存は、従来の律令規制に則った全国画一的な法量と形状を持つ器の製造から、大量生産を見越しての作業工程の省略方向への技術変化であり、律令規制の弛緩によるものと考えられる。

いわば律令期および在地須恵器生産の転換期といえる該期には宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡(22)、上広瀬上ノ原遺跡(11)、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、宮地遺跡、揚榎木遺跡等が挙げられる。

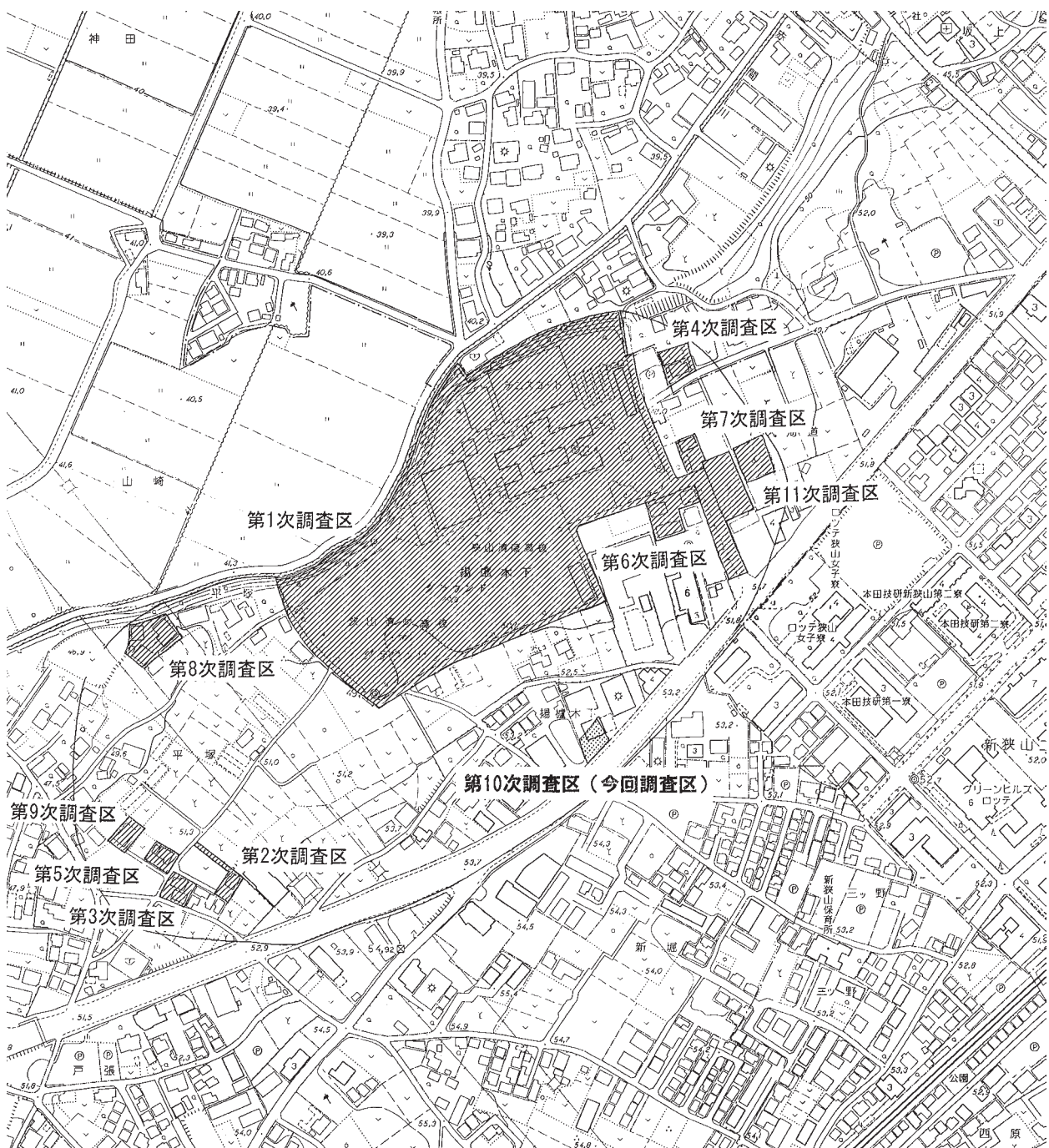
9世紀中頃は集落の肥大化と須恵器の大量生産化の時代で、戸数と掘立柱建物跡の急増、それに伴って生活具のひとつである供膳具にも器種構成や整形技法の簡略化の進行が見受けられる。同時に市域では南比企産須恵器がほぼ使用されなくなる。入間川左岸では宮ノ越遺跡から城ノ越遺跡、御所の内遺跡(20)、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、上広瀬上ノ原遺跡、霞ヶ丘遺跡(12)、今宿遺跡、金井上遺跡(10)、宮地遺跡へと連綿と集落が形成されているが、出土する須恵器は東金子産が圧倒的に多い。右岸でも稻荷上遺跡(47)、揚榎木遺跡、峰遺跡(43)、戸張遺跡、中原遺跡(49)、滝祇園遺跡と、左岸ほどではないもののやはり帯状に大規模な集落が形成されているが、出土する須恵器はやはり東金子産が主体である。

人口の増加と東金子産須恵器の供給量増加は、承和十二(845)年に開始した武蔵国分寺の再建(『続日本後紀』巻十五承和十二(845)年三月己巳(23日)、武蔵國言。國公寺七層塔一基。以去承和二年爲神火所燒。于今未構立也。前男衾郡大領外從八位上壬生吉志福正申云。奉爲聖朝欲造彼塔。望請言上。殊蒙處分者。依請許之。)と連動した、八坂前・新久A-1・2窯(入間市)での瓦焼成に係わる大規模な人資の流入が直接的な原因と考えられる。国分寺再建という武蔵国を挙げての共同事業によって技術の平均化が行われたと考えられ、体部に腰を作り扁平になる等、8世紀の様相を保つ須恵器を生産していた八坂前窯もここにきて一気に器の深身化と底部の縮小が進む。それは在地消費に主眼を置いた生産技術の進歩であり、南比企や末野が先だつて辿った道であり、窯業に対する律令規制の弛緩が一層進んだ証でもある。また、他窯からの技術享受がここにきて行われたということは、東金子産の管理者の技術更新力、大きくいえば中央とのつながりの弱化が進んでいたことを示すものとも考えられよう。

9世紀後半になると住居数は次第に減少し、入間川両岸における住居数や密度の差異はほとんど見られなくなる。当該期の遺跡である宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、小山ノ上遺跡、今宿遺跡、稻荷上遺跡、揚榎木遺跡、戸張遺跡、中原遺跡からは新久A-1・2窯からD-1・3窯の東金子系須恵器が出土するが、約半数は還元焰焼成が上手く行われていない。土師質須恵器の坏や碗も出現し始めることから須恵器生産の諸環境が悪化し、衰退していったことがわかる。この原因は、入間郡・高麗郡を支配していた郡司層の弱体化によって引き起こされた律令規制の弛緩と、国分寺再建という巨大事業の終了が大きいと考えられる。瓦焼成終了後も生産規模を縮小して須恵器は生産されていたが、人口の減少に伴う需要量の低下、窯の燃料となる木材の不足、東海産を主体とした灰釉陶器による市場の寡占という状況に圧迫され、東金子産は操業を終えていったものと考えられる。

### 3 遺跡の概要

揚榎木遺跡は、入間川右岸の台地縁辺部（狭山市上奥宮）に立地し、遺跡内の標高はおよそ50m、遺跡北側の沖積地との比高差は8mである。遺跡面は東西の南方向がやや高くなり、半円形の窪地になっている。縄文時代前期から中期の遺構も検出するが、主な遺構は奈良・平安時代のものになる。1次から9次までの調査で90軒の住居跡が検出されている。市域における入間川右岸の奈良・平安時代集落としては最大で、対岸（入間川左岸）に展開する宮ノ越遺跡、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、今宿遺跡、宮地遺跡との関連を検証することによって、入間川が入間と高麗の郡境界かどうかを傍証し得る遺跡たる可能性を持っている。周辺には戸張遺跡、中原遺跡、稲荷上遺跡がある。

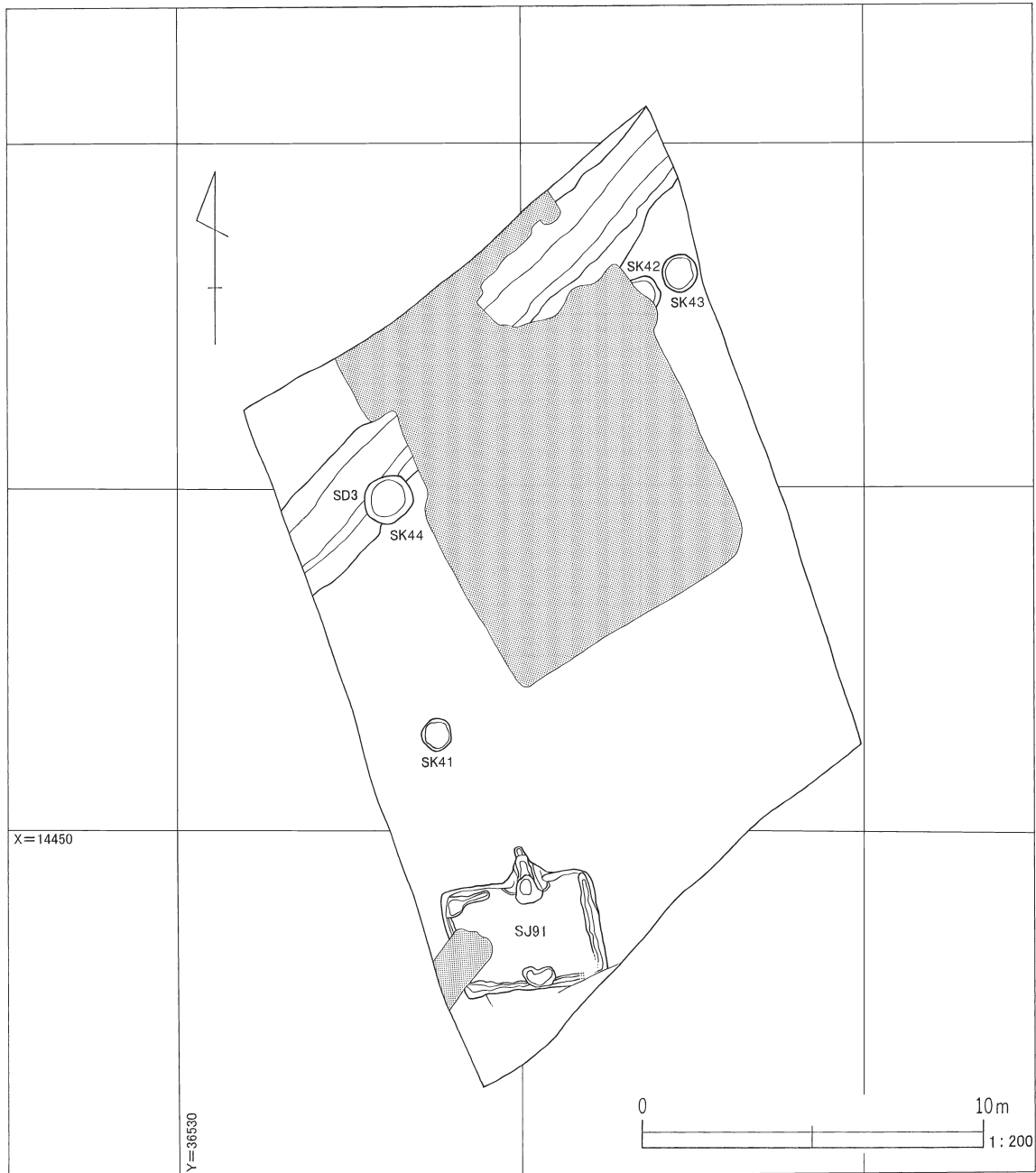


第2図 揚榎木遺跡第10次調査区位置図

# 遺構と遺物

## 1 調査成果の概要

調査の結果、検出された遺構は竪穴住居跡 1 軒、土壇 4 基、溝跡 1 条である。出土した遺物は10世紀前半期と推定される須恵坏、高台付坏、皿、碗、甕、土師甕、台付甕である。また、東金子産の須恵坏片が多数出土したが、図化出来るほどの破片ではなかった。底部は回転糸切り未調整である。



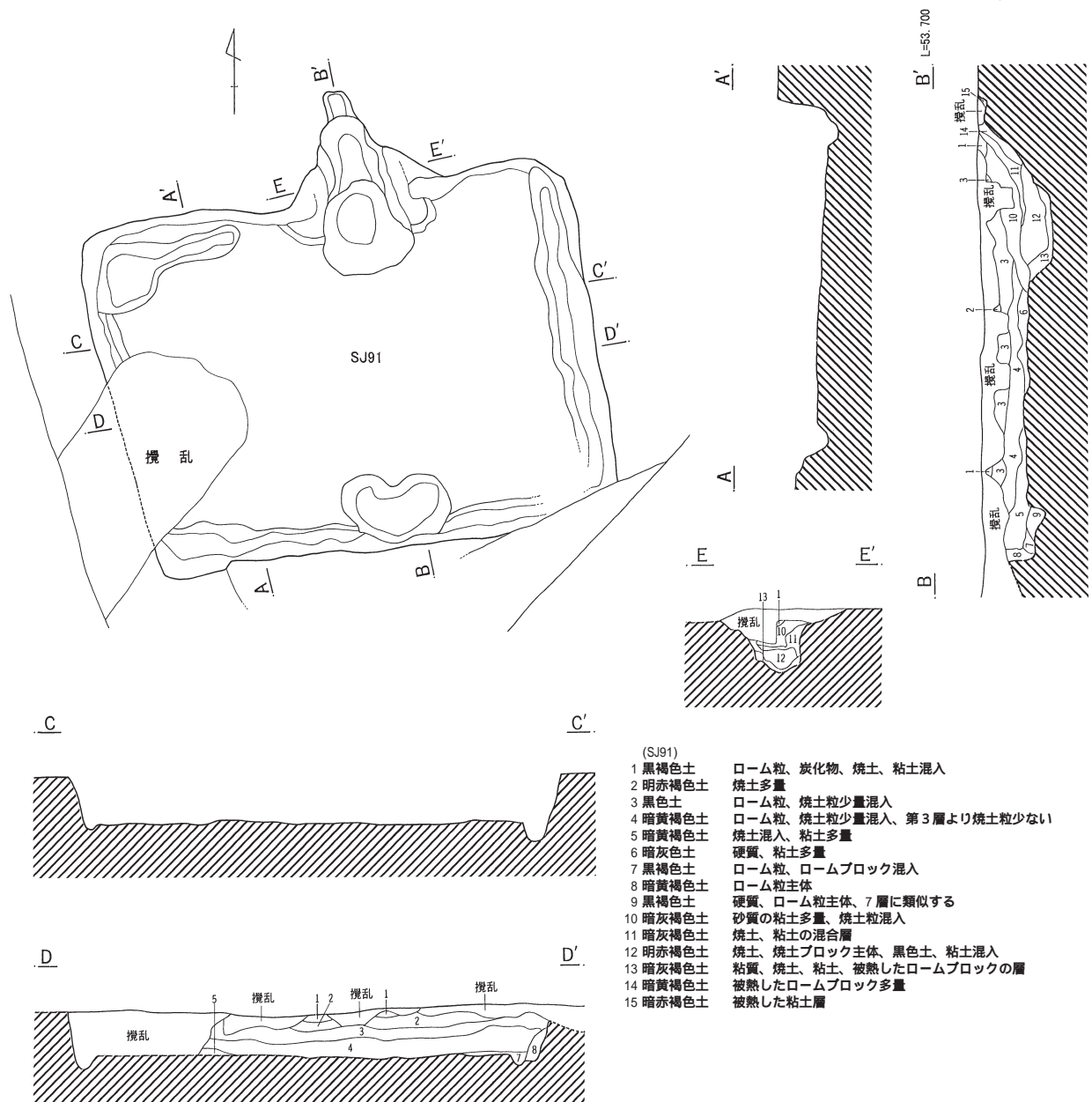
第3図 揚楯木遺跡第10次調査区全測図

## 2 検出遺構と出土遺物

住居跡

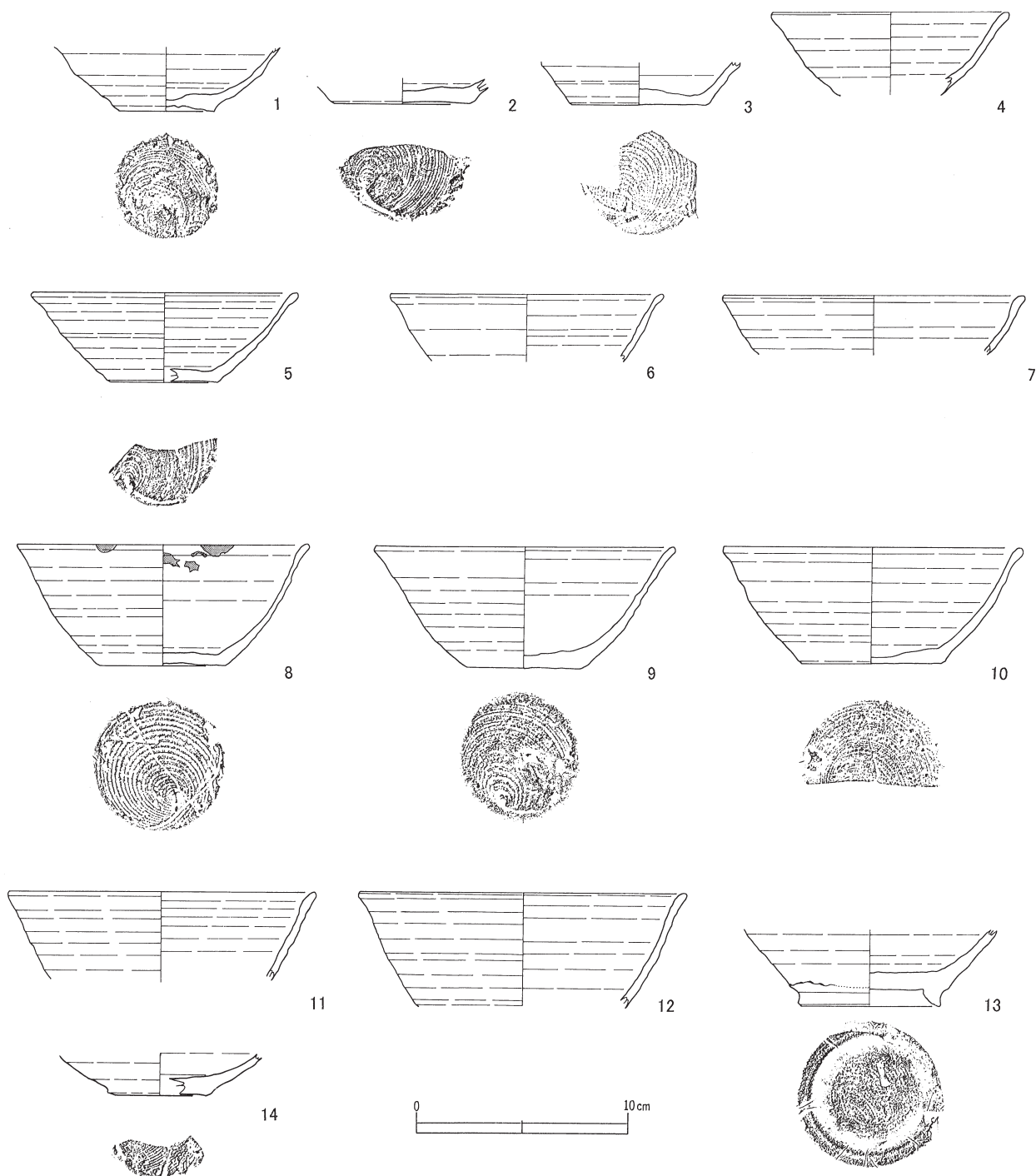
第91号住居跡（第4図）

調査区南端に位置する。全体的に攪乱を受けており、西壁の一部および覆土上層は失われている。床面の遺存状態は良好で、カマドの対極、住居南側に浅い掘り込みを確認できた。平面形は東西主軸方向に長い長方形を呈し、全体の規模は東西4.45m、南北3.21m、深さ0.47mを測る。主軸方位はN - 12° - Wを指す。



0 2m

第4図 第91号住居跡

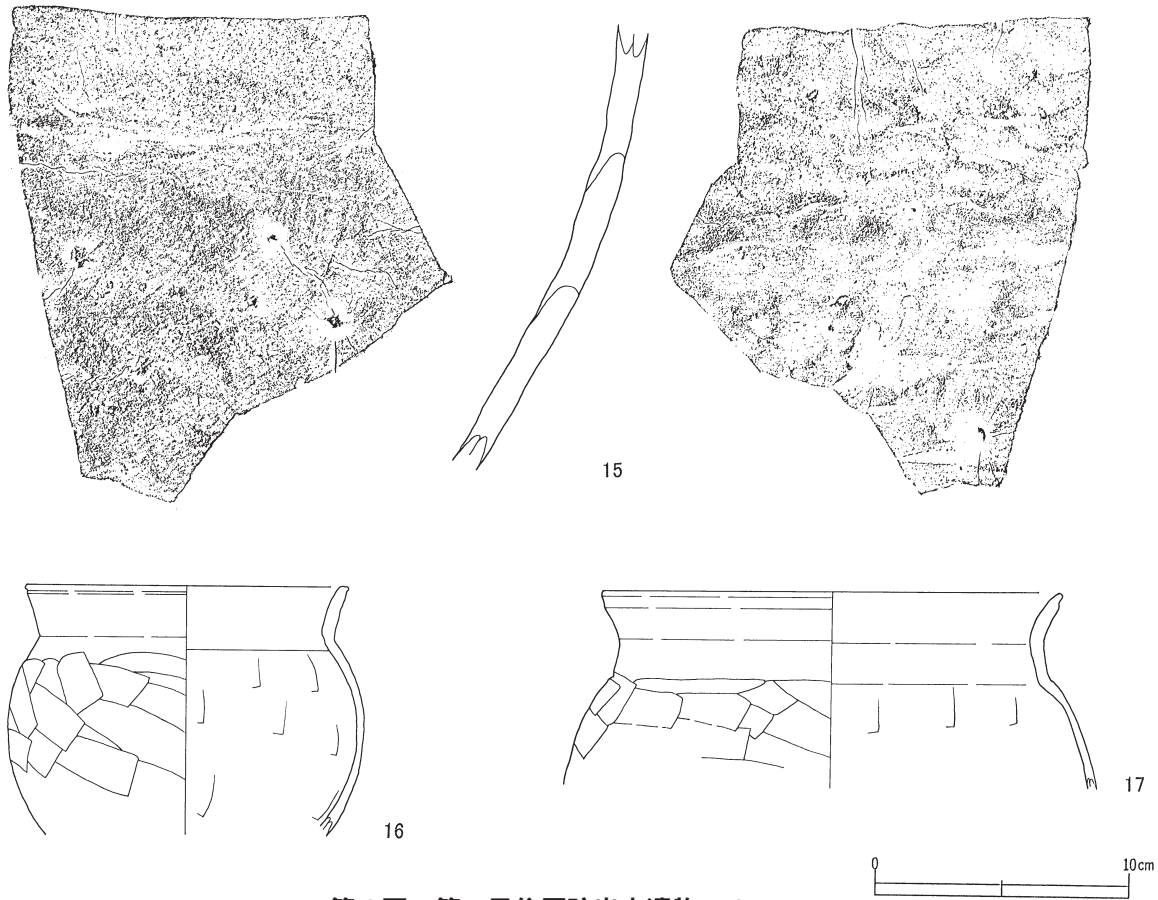


第5図 第91号住居跡出土遺物(1)

第91号住居跡出土遺物観察表1

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵坏	-	4.6	-	50%	白色粒・黒色粒・小礫	普通	淡灰色	回転系切り。体部中位に屈曲有り。東金子産
2	須恵坏	-	6.4	-	15%	白色粒	良好	濃灰色	回転系切り。底部厚手。東金子産





第6図 第91号住居跡出土遺物(2)

第91号住居跡出土遺物観察表2

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
3	須恵坏	-	(6.5)	-	35%	白色粒・黒色粒	良好	濃灰色	回転糸切り。ロク口目顕著。東金子産
4	須恵坏	(11.2)	-	3.9	20%	白色粒・小礫	普通	黄褐色	体部下位に屈曲有り。東金子産
5	須恵坏	(12.6)	(6.0)	4.2	45%	白色粒・黒色粒	良好	淡灰色	回転糸切り。ロク口目磨耗。東金子産
6	須恵坏	(12.9)	-	-	10%	白色粒・黒色粒	普通	明褐色	体部は丸みを帯びる。東金子産
7	須恵坏	(14.2)	-	-	5%	黒色粒・石英	不良	淡灰色	体部は丸みを帯びる。東金子産
8	須恵深型坏	13.8	6.0	5.7	70%	白色粒・赤色粒・小礫	不良	明褐色	回転糸切り。重ね焼き痕有り。東金子産
9	須恵深型坏	14.0	5.4	5.7	60%	白色粒・小礫	やや不良	黄褐色	回転糸切り。体部直線的な立上り。東金子産
10	須恵深型坏	(14.1)	6.8	5.1	40%	白色粒・小礫	良好	濃灰色	回転糸切り。底部中心が薄手。東金子産
11	須恵深型坏	(14.4)	-	-	5%	白色粒・黒色粒	普通	灰色	体部は直線的な立上り。口縁部厚手。東金子産
12	須恵深型坏	(15.0)	-	-	10%	白色粒	良好	暗褐色	体部中位で弱く湾曲する。東金子産
13	須恵高台付坏	-	6.6	-	40%	白色粒・小礫	普通	灰色	高台の断面は隅丸三角形。東金子産
14	須恵皿	-	4.2	-	15%	白色粒・石英	不良	黄土色	回転糸切り。底部厚手。東金子産
15	須恵甕	-	-	-	5%	白色粒・長石・小礫	良好	濃灰色	輪積み痕が顕著。東金子産
16	土師台付甕	12.7	-	-	40%	石英	良好	暗褐色	口縁部「く」字状。斜め方向に削りが施されている。
17	土師甕	(18.2)	-	-	5%	白色粒・黒色粒	良好	赤褐色	口縁部「コ」字状の下方崩れ。口縁部薄手。

床面は中央部および周辺部に貼床が認められるが、全体的に平坦かつ硬質であった。覆土は15層に分けられ、6・10層はカマドの主要構築材である粘土が溶解・流出したものと考えられる。焼土を含む1～5層もカマドから時間をかけて流出したものであろう。

カマドは北カマドで、遺存状態は良好ではあるが上部が耕作により破壊されている。住居覆土と同じで、攪乱によって上層が失われている。両袖の粘土も溶け出していた。琵琶撥形の平面形を呈し、規模は長軸長1.18m、両袖間0.65m、深さ0.66mを測る。土層は1～6層及び10～15層がカマドに由来するものである。

貯蔵穴と見られるピットは検出されなかったが、住居跡北西コーナーに浅い掘り込みを確認した。壁溝は北壁東部を除いて全体を巡る浅いものが検出された。

出土遺物は須恵坏・高台付坏・皿・甕、土師甕・台付甕で、その中の実測可能なもの17点を掲載した。1から7は須恵坏である。1は第4区覆土より出土した。体部中位やや下に顕著な屈曲を持つ。また、体部下位には指差し入れ痕が確認できる。2は住居中央部覆土から出土した底部のみの欠片で、底部が厚手であることがわかる。3は須恵坏の底部および体部欠片で、カマド内から出土した。底部中央が厚く、体部は直線的な立ち上がりを見せる。4は第1区覆土より出土した。1と同様、体部中位に明確な屈曲を有する。口縁端部は外反する。5はカマド内から出土した。ロクロ目が磨耗してあまり見えない。体部中位に弱い屈曲を有し、口縁端部は丸く収めている。6は第3区覆土より出土した。体部に丸みを帯びるタイプのもので、口縁端部直下がやや薄手になる。7は第2区覆土より出土した。これも体部は丸みを帯び、口縁端部直下内面に親指幅の薄手の部分を有する。8から12は須恵深型坏である。8はカマド内から出土した。体部外面のロクロ目2段目から上が黄土色、それ以下が明褐色を呈し、体部内面はそれよりやや上位で色調変化が見られる。口縁端部の一部に油煙が付着している。9もカマド内から出土した。底部はやや厚手で、中心はわずかに窪む。体部は非常に薄く作られており、直線的な立ち上がりで外面のロクロ目が顕著であることが特徴として挙げられる。10は住居中央部覆土より出土した。他のものに比べて底径が大きく、器高が低い。中央が窪む底部を持ち、体部上位のロクロ目が顕著に残る。11は第4区覆土より出土した。体部は直線的な立ち上がりで、ロクロ目が細かく深い。口縁部は厚手に作られているが他は全体的に薄手である。12はカマド内から出土した。やや器形の歪んだ深型坏、もしくは碗である。口縁部は弱く外反する。体部外面のロクロ目3段目より上は灰色、以下は赤褐色を呈し、内面はそれよりやや上位で色調変化が見られる。13は須恵高台付坏で第1区覆土より出土した。貼付高台の断面は丸みを帯びた三角形で、貼付痕が明瞭である。14は第4区覆土より出土した。須恵皿の底部片で、図では立ち上がりをやや強く表したが、もう少し開く形になる可能性もある。底部は厚手で、体部はその半分程度の厚みしかなく薄い。体部のロクロ目は不明瞭である。15は須恵甕体部片で第3区覆土より出土した。体部下位に当たる破片である。輪積み痕が断面から2つ確認できる。外面の叩き目はこの破片の下半分に多く、上半分はナデ消されている。16は第4区覆土より出土した土師台付甕の体部である。口縁部が所謂「く」字状で、同端部直下に明瞭な沈線が廻る。体部のヘラ削りは全体的に斜め方向に施されている。17はカマド内から出土した土師甕上部片である。口縁部が「コ」字状で、やや下辺が崩れた断面形を呈する。体部外面のヘラ削りは上位が横方向、中位以下が縦方向に入る。無調整の部分も散見できる。

## 土壌

### 第41号土壌（第7図）

第91号住居跡の北に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形の浅い土壌で、規模は径0.92m、深さ0.10mを測る。土層は2層に分けられる下位に黒色土があり、焼土粒が混入している。性格等詳細は不明である。

### 第42号土壌（第7図）

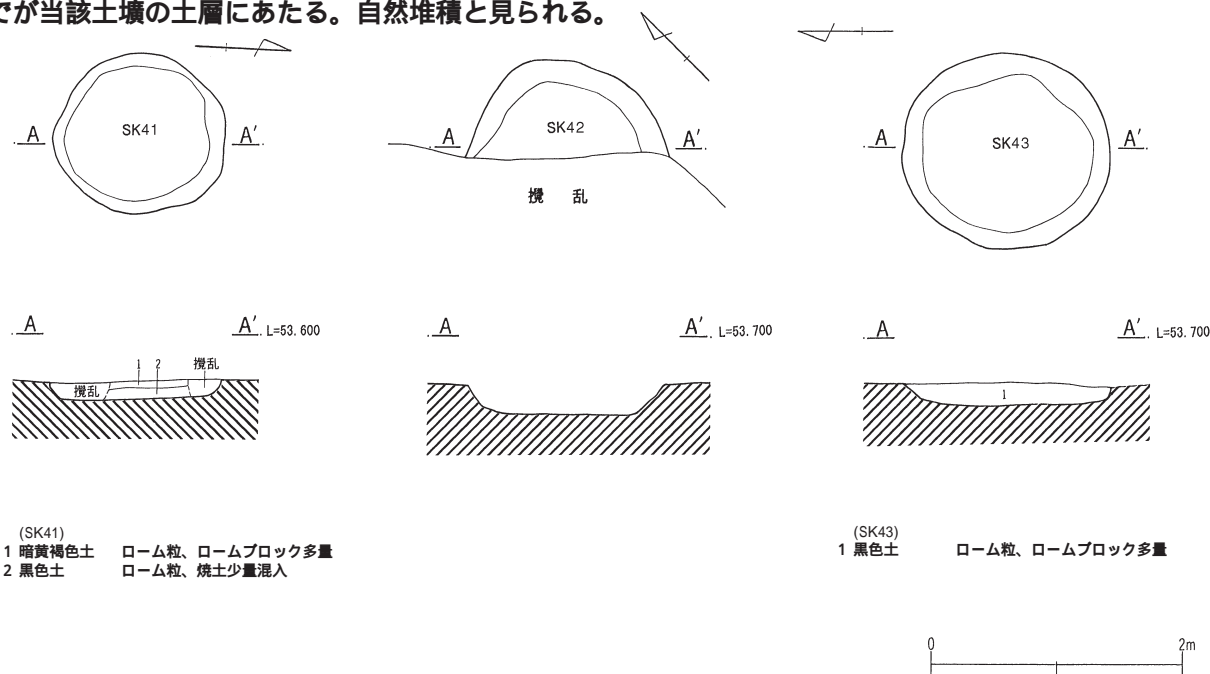
調査区北、第2号溝跡付近に位置する。平面形は推定円形で、断面形は逆台形で浅い。規模は径1.04m、深さ0.18mを測る。攪乱が著しく、土層を分けるに至らなかった。

### 第43号土壌（第7図）

第45号土壌のすぐ東に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形で非常に浅い土壌である。規模は径1.11m、深さ0.12mを測る。覆土は単一で、焼土等は確認できなかった。性格等詳細は不明である。

### 第44号土壌（第8図）

調査区の北西に当たる位置で第2号溝と重複し、これを切る。平面形は円形、断面形は半円形で、丸底を呈する。規模は径1.41m、深さ0.52mを測る。覆土は4層に分けることができ、図中第1層から第4層までが当該土壌の土層にあたる。自然堆積と見られる。



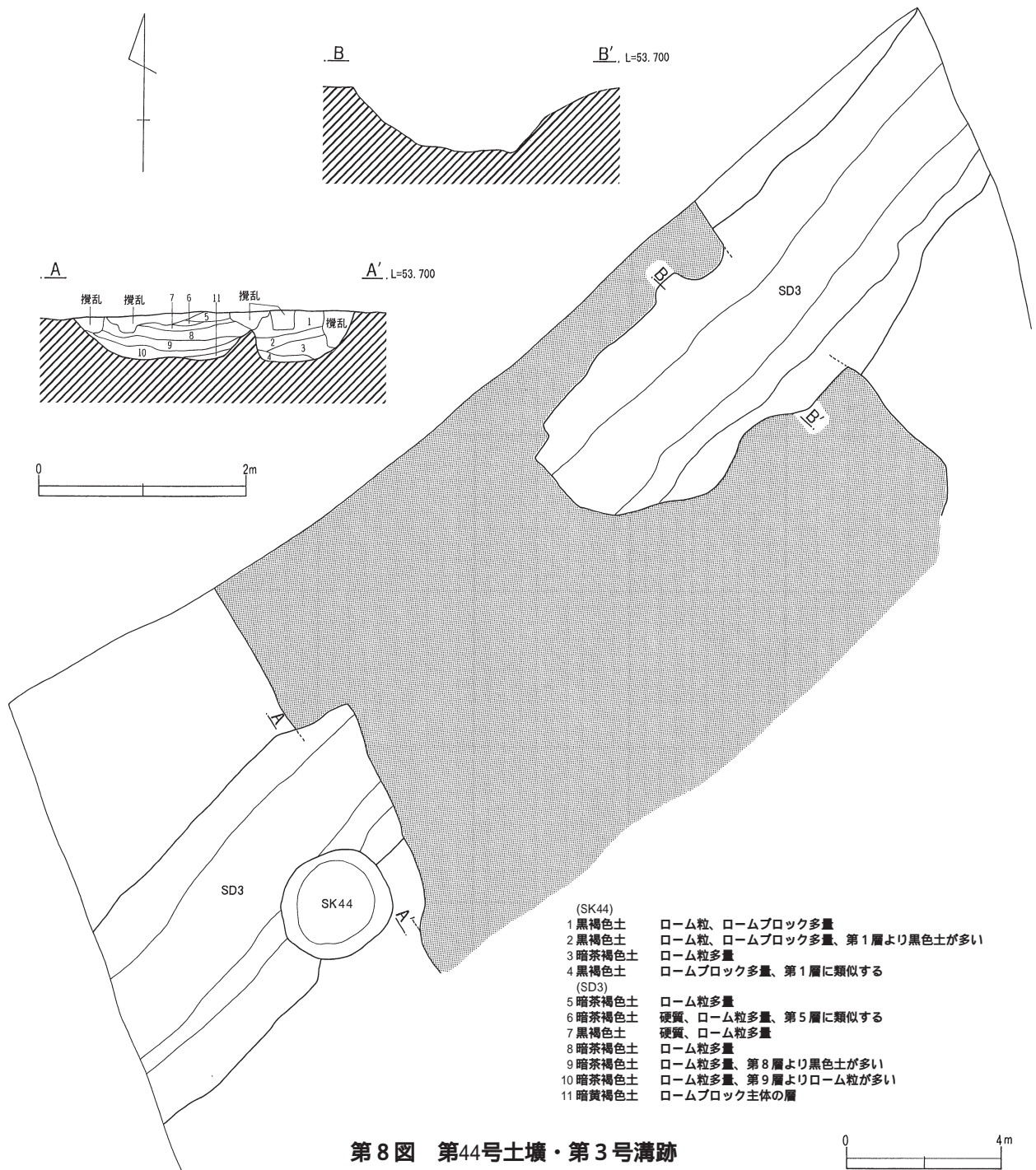
第7図 第41・42・43号土壌

## 溝跡

### 第3号溝跡（第8図）

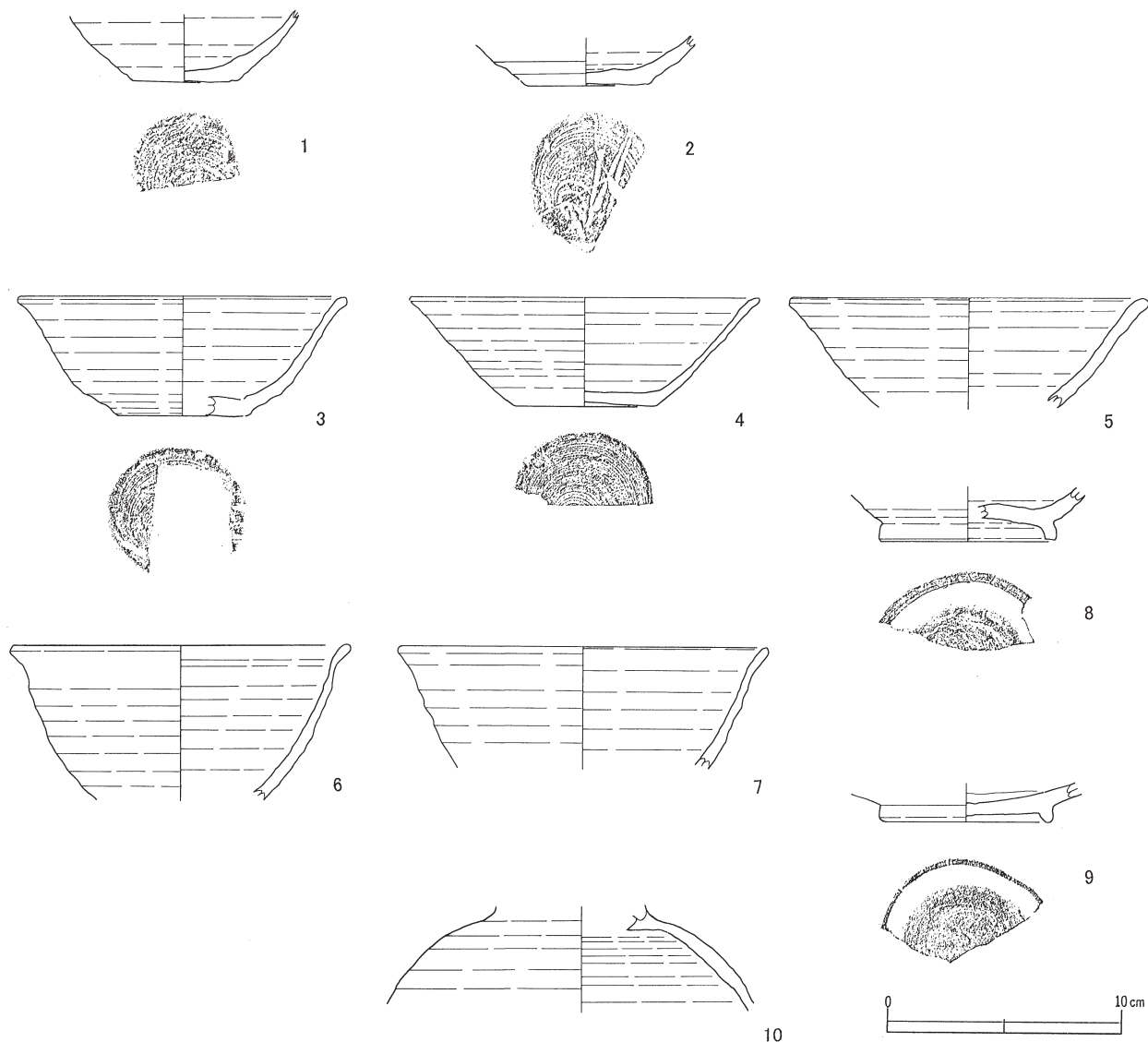
調査区北部を北東から南西に向けて貫く。溝の断面形は底の広い薬研状で幅2.55m、深さ0.61mを測る。図中第5層から第11層が溝の層であり、大部分は自然堆積によって形成されているが、第8層上部に硬化面が認められ、一時的に道として使用されていたものと考えられる。

出土遺物は須恵坏・高台付坏・埴・高台付皿・長頸瓶で、その中の実測可能なもの10点を掲載した。1は須恵坏で、口縁部を欠く。丸みを帯びる立ち上がりで、底部内面と体部内面の境が不明瞭な調整がされ



第8図 第44号土壌・第3号溝跡

ている。2は須恵坏底部である。底部に「Z」字状のヘラ記号が確認できる。3は須恵坏である。体部下位は丸みを帯び、底が厚手になる。口縁端部は若干外反する。4は体部が非常に薄手の須恵坏で、ロクロ目も不明瞭である。重ね焼痕が口縁部に残り、口縁部内面から体部外面は濃灰色で器内面はほぼ明灰色を呈する。5は須恵坏で、器厚が平均0.45cmもある。焼成不良のために器外面は磨耗が激しく、粉を吹いたようにザラつく。6は東金子産の須恵坏で、整形時に口縁端部直下を強くつまんだため、極端に薄くなっている。7は南比企産の須恵坏で、体部は弱く内湾して立ち上がるが、口縁端部は屈曲して外に開く。8は須恵高台付坏で、高台は断面が台形、高台の接地面には溝が確認できる。9は灰釉陶器の高台付皿で、貼付高台の断面はほぼ半円形である。灰釉は内底面の径3.5cmより外側に塗布されている。ロクロ目が顕著である。10は須恵長頸瓶の肩部で、外面は自然釉が付着した上で更に被熱し、殆ど飛んでいる。



第9図 第3号溝跡出土遺物

第3号溝跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵坏	-	5.0	-	10%	長石・小礫	良好	灰色	回転糸切り。体部下位が湾曲する。東金子産
2	須恵坏	-	5.6	-	20%	白色粒・長石・小礫	不良	黄土色	回転糸切り。ヘラ記号「Z」。東金子産
3	須恵坏	13.8	5.8	5.1	40%	白色針状・白色粒・長石	良好	灰色	回転糸切り。体部下位が湾曲する。南比企産
4	須恵坏	15.0	6.0	4.7	40%	白色粒	普通	淡灰色	回転糸切り。体部直線的な立上り。東金子産
5	須恵坏	(15.0)	-	-	10%	長石・小礫	不良	淡灰色	回転糸切り。体部中位が湾曲する。東金子産
6	須恵碗	(14.8)	-	-	40%	黒色粒・小礫	不良	黄褐色	口縁部直下が極めて薄くなる。東金子産
7	須恵碗	(15.6)	-	-	10%	白色針状・長石	不良	淡灰色	口縁部は外反し、体部は若干湾曲する。南比企産
8	須恵高台付碗	-	7.4	-	20%	白色粒・小礫	良好	灰褐色	回転糸切り後に高台貼付。東金子産
9	灰釉高台付皿	-	6.8	-	20%	白色粒・黒色粒・長石	良好	淡灰色	高台の断面は半円形。釉薬は八ヶ塗り
10	須恵長頸瓶	-	-	-	5%	黒色粒・小礫	良好	灰色	外面に著しく降灰を受けている。東金子産

# まとめ

## 第91号住居跡について

第10次調査区は、揚榎木遺跡の中心部と考えられる第1次調査区の南約50mに位置する。両調査区間には間隙があり、第91号住居跡が第1次調査区で検出された集落の一部に属していたかが判断しかねるところだが、第11次調査区（未報告）第92号住居跡と戸張遺跡県第1次調査区第6号住居跡の双方から出土した墨書「原」の存在は揚榎木遺跡と戸張遺跡間の何らかの繋がりを示唆するものであり、揚榎木遺跡は戸張周辺に届く規模の集落として考えることができよう。このことから今回検出された第91号住居跡についてもこの揚榎木～戸張広域集落の一部の可能性が高いといえる。

第91号住居跡は、須恵小型坏の口径が11.2～12.9cmで、底径が4.6～6.4cmと、口径が底径の1/2程に収まり、器高も4cm前後のものが多い。共伴する土師甕の口縁部も「コ」字状崩れであり、これらのことから9世紀末～10世紀第1四半期に比定される。

同期の遺構として、揚榎木遺跡では第54・55・59・66・76・80・82号住居跡及び第4・5・6・10号掘立柱建物跡が（仲山1988）、戸張遺跡では県第4・5・6・9号住居跡が（大屋1990）近接して存在している。

今回の結果は、遺構分布という視点から揚榎木～戸張間の関連性を補強する資料となり得るものであり、今後墨書や遺構の主軸方位の共通性の高さなども検討材料の一つに加えた上で、揚榎木・戸張の両遺跡を一つの視野に入れて検討していく必要性を高めた、と考えられる。

## 揚榎木遺跡編年対応表

	8c1	8c2	8c3	8c4	9c1	9c2	9c3	9c4	10c1	10c2	10c3
揚榎木1次											
揚榎木10次											

## 参考文献

- 今井正美他 1986 『狭山市埋蔵文化財調査報告書4 揚榎木遺跡』 狭山市文化財報告第12集
- 大屋道則 1999 『戸張/中原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第237集
- 小淵良樹 1987 『狭山市埋蔵文化財調査報告書6 揚榎木遺跡3～6次』 狭山市文化財報告第13集
- 小淵良樹 1988 『狭山市埋蔵文化財調査報告書7 揚榎木遺跡7次・9次』 狭山市文化財報告第14集
- 酒井清治 1987 「埼玉県の須恵器の変遷について」『埼玉の古代窯業調査報告書』 埼玉県立歴史資料館
- 酒井清治 1987 「武蔵国における須恵器年代の再検討」『研究紀要』9号 埼玉県立歴史資料館
- 坂詰秀一 1971 『考古学調査報告 武蔵新久窯跡』 雄山閣出版
- 坂詰秀一 1984 『八坂前窯跡』 八坂前窯跡調査会・入間市教育委員会
- 高橋一夫他 1974 『前内出窯址発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会報告第24集
- 仲山英樹他 1985 『狭山市埋蔵文化財調査報告書 揚榎木遺跡2次』 狭山市文化財報告第 集
- 仲山英樹 1988 「古代集落遺跡出土の墨書土器」『古代集落の諸問題』 玉口時雄先生古稀記念事業会
- 渡辺 一他 1990 『鳩山窯跡群 窯跡編(2)』 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

写 真 图 版

图版 - 1



調査区全景 (第3图)



第91号住居跡 (第4图)





第91号住居跡カマド（第4図）



第41号土壇（第7図）



第42·43号土壤（第7图）



第44号土壤·第3号沟迹（第8图）



第91号住居跡出土遺物 (第5図 - 1)



第91号住居跡出土遺物 (第5図 - 5)



第91号住居跡出土遺物 (第5図 - 8)



第91号住居跡出土遺物 (第5図 - 9)



第91号住居跡出土遺物 (第5図 - 10)



第91号住居跡出土遺物 (第5図 - 13)



第91号住居跡出土遺物 (第6図 - 16)



第91号住居跡出土遺物 (第6図 - 17)

図版 - 5



第3号溝跡出土遺物 (第9図 - 3)



第3号溝跡出土遺物 (第3図 - 4)



第3号溝跡出土遺物 (第9図 - 8)



第3号溝跡出土遺物 (第9図 - 9)



調査風景

# 報告書抄録

ふりがな	う つ ぎ いせき							
書 名	揚 櫓 木 遺 跡							
副 書 名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	埼玉県狭山市遺跡調査会報告書							
シリーズ番号	第18集							
著 者 氏 名	安井 智幸							
編 集 機 関	埼玉県狭山市遺跡調査会							
所 在 地	〒350 - 1380 埼玉県狭山市入間川 1 - 23 - 5 TEL 04 - 2953 - 1111							
発行年月日	西暦2007 (平成19)年7月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	。	。			
う つ ぎ いせき 揚櫓木遺跡	さいたまけんさやまし 埼玉県狭山市 かみおくとも 上奥宮19番 - 7外	22	27	35 52 20	139 25 32	19981211 ~ 19990114	340	店舗建設 に伴う 事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主な遺物	特 記 事 項		
揚櫓木遺跡	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡	1 軒	須恵器			
			土壌	4 基	土師器			
			溝跡	1 条				

狭山市遺跡調査会報告書 第18集

揚 櫨 木 遺 跡

-- 第10次調査 --

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成19年8月24日 印刷

平成19年9月1日 発行

発行 埼玉県狭山市遺跡調査会  
埼玉県狭山市人間川1丁目23番5号  
04 - 2953 - 1111

印刷 巧和工芸印刷株式会社

【正誤表】

楊楯木遺跡 第10次調査

(狹山市遺跡調査会報告書 第18集)

ページ	行	誤	正
6ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	48 上中原遺跡	22025	22039
	49 中原遺跡	22025	22038